■研究論文

ローマ都市貴族とビザンツ帝国

竹部隆昌

Medieval Roman Urban Aristocracies and Byzantine Empire

Ryusho TAKEBE

抄録/概要/要旨　本論考は、所謂イコノクラスム以降、ビザンツ帝国は教皇に対する総主権を完全に失ったとする一般的歴史認識に対して、九世紀にもう一度ビザンツ帝国が教皇に対する総主権を回復したことを証明するのが目的である。その際に注目したのは、当時教皇を傀儡化していたローマ都市貴族とビザンツ帝国との友好関係であり、その背景として当時ローマ教皇領領を脅かしていたイスラム海賊に対して、キリスト教世界唯一の海軍国であったビザンツ帝国の活躍について考察した。

キーワード：　ビザンツ帝国、ローマ都市貴族，イスラム海賊

はじめに

西洋中世史におけるビザンツ帝国とローマ教皇庁との関係は、東西キリスト教会の文脈で語られることが多い。特に東西教会の分離に決定打となったと評されてきたのが、ビザンツ皇帝レオン三世が七二六年に発布したイコノクラスム（聖像破壊）令に、時の教皇が反旗を翻した事件である。この際に教皇がレオン三世に「破門」を宣告したのが、教皇がビザンツ皇帝に反対の姿勢を初めて鮮明としたものとして評価されてきた。

しかし、既にイコノクラスム令がローマ教会に伝えられる前に、教皇がレオン三世に対してイタリア半島で徴収した税の送金を拒否したことで、レオン三世から「大逆罪」を宣せられていた事は、あまり重要視されてこなかった。(1) またハルドンの実証的研究によって、西方においてはイコノクラスムは東方に置けるような深刻な社会問題とならなかったことが明らかとなり(2)、今ではこれが定説化している。西方ではシチリア教会とナポリ教会だけがイコノクラスム令を受け入れたが、当時両教区とも教会装飾としては、壁画・彫刻とも目立った作品が無かったことが、大きな社会的対立が教区内で発生しなかった理由と考えられる。今日世界遺産となっているラヴェンナ教会群を有したラヴェンナ教会は、それ以前は単意論などの教義問題などビザンツ皇帝の教会政策には追随してきたが、イコノクラスムについては初めて拒否の態度を取ったため(3)、壁画や彫刻が失われることはなかった。その意味で、ラヴェンナ教会の造反は、少なくとも文化史的には教皇のイコノクラスム令拒否よりも重要な事件であったと言える。

さて、その後の歴史的推移において、ローマ教会はビザンツ帝国からの離脱傾向を先鋭化させ、七五一年のビザンツ帝国のイタリア半島支配の要であったラヴェンナ総督府がランゴバルド王に占領されると、時の教皇ザカリアスはフランク王ピピンに接近し、教皇の願いに応じたピピンはアルプスを越えて進軍し、ラヴェンナをランゴバルド王から奪還し、その地を教皇に寄進したのが教皇領の始まりとされてきた。(4) さらにピピンの子カールを八〇〇年の降誕祭に戴冠して)、四七六年のオドアケルによる西ローマ帝国滅亡以来の皇帝を西方に出現させた事で、教皇権は完全にビザンツ帝国と決別したというのが、現在でも一般的な歴史認識であると言える。

しかしながら、ビザンツ皇帝が教皇選出に関わった最後の事例とされるのは九九九年のバシレイオス二世による対立教皇の任命である。この教皇は、オットー三世によって逮捕・廃位されたが(5)、なぜカール大帝の戴冠から二百年近く経った時期に、バシレイオス二世は教皇選出に関与できたのかという疑問が湧いてくる。同時に、逆にこの事件がビザンツ皇帝関与の最後の事例となった背景についても興味が湧いてくる。

この問題関心の解明については、イコノクラスムなどの教義論争という、純粋にキリスト教精神史の問題だけでは、解明は不可能なように思える。そして、ビザンツ帝国と教皇庁との世俗的関係に注目する事こそが、この問題関心の解明に結び付くものと考えたい。

以上のような観点から、本論考では九～十一世紀のビザンツ皇帝と教皇庁との世俗的関係を中心に考察を行う。

第一章　ビザンツ帝国と「教皇の銅の時代」

ビザンツ帝国が再びローマ教皇庁に対して影響力を振るう契機となったのは、教皇ヨハネス八世のマケドニア朝初代皇帝バシレイオス一世に宛てた書簡であった。(6) 当時の

都市ローマは、二つの脅威に晒されていた。一つは教皇領に隣接するスポレート公のグイードとランベルトゥスが教皇領に領土的野心を顕わにしていた事である。二つ目は考えようによっては、より深刻な教皇庁に対するイスラム包囲網であった。

当時南イタリアは、ランギバルド族のベネヴェント侯国の傭兵からのし上がり正式にバグダッドのアッバース朝カリフによって認められたバーリのアミラートゥス（君侯国）の他に、やはりランゴバルドのサレルノ侯国に傭兵として雇われたクレタ島から来てオトラントに拠点を築いた一派、カンパニアではガエタに雇われガリリアーノ河口に砦を築いていた一派、ナポリに雇われヴェスヴィオス山近辺に居を構えた一派など、旧サラセン帝国各方面から飛来したイスラム傭兵の跋扈する状態にあった。つまり当時の南イタリアは、ランゴバルド三国とカンパニア三国間の群雄割拠間の抗争の結果、イスラム傭兵天国と化していたのである。各国間の抗争が無く、俸給に与かれないときには、イスラム傭兵は雇い主以外の領土を蹂躙し略奪を恣にしていた。その際に犠牲となるのは教会が多かった[7]。傭兵の中でも特にガリリアーノの一派は略奪の標的を中部イタリアにまで求め、教皇領のリミニやテルミといった交通上の要路に略奪拠点を築いて、都市ローマを包囲する勢いで中部イタリアを脅かすに至っていた[8]。また北イタリアに位置するファーティマ朝からは、海賊の一団がローマを略奪した事すらあった[9]。そしてカンパニア三国のナポリ・アマルフィ・ガエタの三国は、イスラム海賊の補給基地と化していた。[10]

この状況で教皇ヨハネス八世は、カロリング朝の皇帝に対してはスポレート公の脅威からの解放を願ったが、皇帝はイタリアへの進軍を行ってはくれなかった。他方イスラム海賊についてはアルプス以北のカロリング朝には海軍が不在のため、ヨハネス八世はカンパニア三国に対してはイスラムとの関係の解消と、教皇領のティレニア海側の防衛のための艦隊の派遣を依頼したが、三国はこれを無視した。ヨハネス八世は破門を持って三国を脅したが、全く効果は無かった[11]。後の教皇権の絶頂期とは違って、教皇権は弱体で破門には実質的な効力は無かったのである。この孤立無援の状態の中、ヨハネス八世にはビザンツ皇帝に泣きつく以外の選択肢は無かったのである。ヨハネス八世は時のビザンツ皇帝バシレイオス一世に対する書簡で、皇帝に「我らがアウグストゥス」と呼びかけることで、正式にビザンツ皇帝の総主権下への復帰を表明している[123]。

幸い当時のビザンツ帝国は、長らく歴史家によって、「ビザンツ帝国の最盛期」とか「当時の世界最強国」と評価されるマケドニア朝が久々に活力に溢れた皇帝バシレイオス一世の下で八七九年に開かれたばかりの時期であった。その背景としては、長らくビザンツ帝国を脅かしてきたバグダッドのアッバース朝のカリフの権力低下の結果としてサラセン帝国が瓦解したという世界史的大変動があった。アッバース朝はカリフは名目上の権威は健在であったが、旧サラセン帝国領内では旧来の君侯国の分離・独立や、ファーティマ朝のような新興勢力の出現によって群雄割拠状態への移行が露わとなってくる。その最中、ビザンツ帝国は東方国境で優勢に転じ、またイリュリクムのイスラム海賊諸拠点を虱潰しにすることで、アドリア海の制海権を奪取するのに成功した[14]。さらにビザンツ海軍はバーリの君侯国を滅ぼすのを皮切りに、南イタリアの再征服に成功し、バーリを拠点にアプリアにテマ・ランゴバルディア、レッジョを拠点にテマ・カラブリアを置くことになる[13]。

このビザンツ帝国の南イタリア再征服によって、地中海の対岸のファーティマ朝との敵対は不可避となっていたため、ティレニア海での艦隊行動のための拠点作りはバシレイオス一世にとっても急務であり、教皇ヨハネス八世の申し出は、皇帝にとっても渡りに船の提案であった。教皇の要請に応えビザンツ艦隊が派遣され、首尾よく八七九年にイスラム艦隊をナポリ沖で殲滅すると、その海軍力を恐れたランゴバルド三国とカンパニア三国はビザンツ皇帝の総主権を認めることになった[14]。共に皇帝の総主権下に入ったためであろう、それまでの軍事的抗争は下火となっていき、最終的には南イタリアからイスラム傭兵は消滅する。さらに中部イタリアのスポレート公グイードもバシレイオス一世の総主権に下ったため、やはり同じ皇帝の総主権の下では教皇領に対する本格的な軍事行動に出にくくなったため、スポレート公の脅威も去った。このようにビザンツ海軍の勝利は、ヨハネス八世にとっては一石二鳥の効果を上げたといえよう。さらにヨハネス一世の要望に応えて、バシレイオス一世はビザンツ小艦隊のローマの外港オスティアへの常駐を承諾し、後の教皇に下で増強も実現した[15]。

このように一見ヨハネス八世の悩みは解消されたかのように見えたが、好事魔多し、ヨハネス八世は教皇庁の内部抗争によって暗殺されてしまった。史料によると、「ヨハネス八世は、毒を盛られた上に、もがき苦しむのを、敵対者によってたかられて撲殺された」という惨い最後を遂げた[16]。史料上、教皇暗殺を公然と記した最初の事例である。この事件を契機として、数百年に渡る期間を現在の歴史家は「教皇の銅の時代」呼んでいる。それは、ローマ内外の西方の有力者たちによって、教皇が政争の道具として「傀儡化」され、歴代教皇は「使い捨ての駒」として公然と或いは暗に殺されていったのが「銅の時代」と称される由縁である。オスティアに艦隊を駐屯させていたのも関わらず、バシレイオス一世はヨハネス八世の暗殺者たちを罰そうとする素振りも見せなかった。この事から、教皇領をイスラム海賊から守りはするが、教皇庁内の抗争などには関わらないというのが、バシレイオス一世のスタンスであったことが窺われる。

そのように当時のイタリアの有力者たちも判断したのだろう、この「銅の時代」イタリアの諸勢力は本格的な戦闘は

控えつつも、ローマ行軍による示威行動や謀略・暗殺によって権力闘争を演じるようになった。「銅の時代」開幕と共に教皇領を牛耳ったのはスポレート公グイードと息子のラムベルトゥスであり、両者は拠点をスポレートから教皇領内のラヴェンナに移し、教皇に強要して皇帝戴冠を果たした。ただしビザンツ皇帝に配慮して「ローマ人の皇帝」ではなく「フランク人の皇帝」と称した[17]。また皇帝を称しながらローマに君臨するのも控えて、父子はローマに用事があるとき以外はラヴェンナに常駐し、ローマには皇帝名代としてグイードの妻が常駐するという形式を取った。やがてグイードが亡くなり、続いてラムベルトゥスが落馬によって不慮の死を遂げると[18]、次にローマの支配権を握ったのは、ローマ都市貴族の名門テオフュラクトゥス家の党首で、「元老院議長」と自称したテオフュラクトゥスであった。

第二章　ビザンツ帝国とテオフュラクトゥス家

テオフュラクトゥス家の党首テオフュラクトゥスは、先代ラムベルトゥスの時にはローマにとって天敵とも言うべき存在であったにあったスポレート公を継いだアルベリクス一世と娘マロティアとの政略結婚を実現しただけでなく、やはり敵対勢力のフリウリ伯ベレンガルスについては彼の臣下で妻テオドラの元愛人であったヨハネスを教皇ヨハネス一〇世に登位させ、ヨハネス十世によってベレンガリスを皇帝戴冠させることで懐柔した。[19] ヨハネス一〇世は、スポレート公とは縁続きのカプア＝ベネヴェント公を通じて南イタリア政策に乗り出し、教皇領の略奪の常習犯であったガリリアーノのイスラム勢力と雇い主のガエタを説得し、トスカナを除く全イタリア半島勢力からなるガリリアーノ殲滅同盟を成立させた。ビザンツ艦隊がイスラム海賊の援軍や補給を阻止するために海上封鎖を行う中、同盟軍の総攻撃によってガリリアーノ要塞は炎上し、ここに南イタリアにおけるイスラム勢力は九一四年についに一掃された[20]。

テオフュラクトゥス家の次世代を背負ったのは、マロティアとアルベリクス一世の嫡子アルベリクス二世であったが、彼も親ビザンツ政策を受け継いだのは、嫡子オクタヴィアヌスの妻にビザンツの「緋の産室生まれ」即ち正嫡のビザンツ皇女を求めたことから明らかである。[21] 結局婚礼は整わず、アルベリクス二世は未だ少年であり俗人であったオクタヴィアヌスを教皇ヨハネス十二世として教皇座に据えることで権力の世襲を謀った[22]。成人したヨハネス十二世は人妻との情事が発覚して失脚したが、ザクセン朝のオットー大帝に援助を求め、その依頼に応じたオットー大帝は第一次イタリア遠征を行い、ヨハネス十二世を復位させた[26]。しかし、その後ヨヘネス十二世とオットー大帝は決裂し、再び失脚したヨヘネス十二世は失意の内に没し、これによって四代に渡ったテオフュラクトゥス家のローマ支配は終焉を迎えたのである[23]。

史料はオットー大帝がローマに入城した際、『元老院議員（ここではローマ都市貴族）とギリシア人の高官が出迎えた』と記している[24]。史料が記す「ギリシア人の高官」とは、おそらくビザンツ艦隊の高位軍人を指すものと思われる。この事から、ビザンツ側がオットー大帝のローマへの政治的介入を静観していた事がうかがわれる。オットー大帝側も、ビザンツとは友好関係を望んでいた。オットー大帝もまたイスラム勢力の存在に長年悩まされていたからである。そのイスラム勢力とは南仏プロヴァンスのイスラム海賊の一大拠点フラクシネトゥムであった[)]。

フラクシネトゥムと呼びならわされるようになるプロヴァンスの一地域は、九世紀末頃に難破したイスラム海賊船が漂着し、その港に適した海岸線と近接する険しい峰には一本の隘路しかないという籠城するには理想的な砦としての立地条件からイスラム海賊が居付き、結果として地中海における一大海賊拠点へと発展する。実際ビザンツ軍は二度に渡ってフラクシネトゥム遠征を行い海賊船団を焼き払い海上では完勝したが、籠城されたため壊滅には失敗していた[25]。フラクシネトゥムには、陸海での長期の封鎖作戦しか攻略法は無かった。完敗してもフラクシネトゥムの回復は早く、さらには陸上にも勢力を拡大し、南仏のアルルやアヴィニョンを略奪しただけでなく、イタリアのモンペリエに砦を築いたのを足掛かりにアルプス山中にまで出没し、現在のドイツとスイスの国境付近のゼンクト・ガレンまでも略奪を被った。さらには、イタリアとドイツを結ぶサン・ベリリアーノ峠に関所を築いて、旅人から交通料や関税を徴収し、聖職者を拉致して身代金をせしめる等し、約二十年に渡って「スイスの主人」となったと現在の歴史家に評されている[)]。つまりフラクシネトゥムは陸海の双方で西方キリスト教世界の脅威となっていたのである。

フラクシネトゥムは、イスラム教国家にとっても放置できない存在にまで成長したようで、後ウマイヤ朝のカリフであるアブド＝アッラフマーン三世はオットー大帝に後ウマイヤ朝艦隊とのフラクシネトゥム攻略の陸海共同作戦の提案をしている[)]。オットー大帝は、この申し入れを断った。史料は断った理由を、後ウマイヤ朝の書類に『キリスト教を侮辱する文言があった』としているが[26]、後ウマイヤ朝は既にビザンツ帝国と国交があったから、史料が言うような初歩的ミスがあったとは考えにくい。オットー大帝が断った理由としては、たとえ首尾よく攻略に成功したとしても戦後処理の段階で、フラクシネトゥムの領有についての問題が浮上するのは目に見えており、イスラム海賊の巣窟が後ウマイヤ朝の海軍基地に変じられたら、西方は海賊行為以上の危険にさらされるのは確実であり、海軍を有さないオットー大帝には後ウマイヤ朝の動きを阻止する手立てがないのも、また明らかであった。ビザンツ帝国なら攻略成功

の暁でも、南仏の飛領まで要求するのは非現実的であるから、フラクシネトゥム攻略に当たってオットー大帝が海軍力の援助を頼りにできるのは、唯一ビザンツ帝国しかなかったのである。そのため、オットー大帝も当時の皇帝ニケフォロス二世フォーカスに、寵臣のクレモナのリュートプラントをコンスタンティノープルに派遣して「緋の産室生まれ」の皇女を息子オットー二世の妻に降嫁してもらおうと交渉させた。この交渉は、ニケフォロス二世の拒否によって不調に終わった[27]。しかしニケフォロス二世を暗殺して帝位に登ったヨハネス一世ツミスケスは、「緋の産室生まれ」の皇女ではなかったが、皇帝自身の姪とされるテオファノをオットー二世に降嫁させ、同年ビザンツ艦隊の第三次フラクシネトゥム遠征による陸海共同作戦で陥落させた。フラクシネトゥム陥落の翌年、オットー大帝は薨去した[28]。

第三章　ビザンツ帝国とクレスケンティウス家

テオフュラクトゥス家に替わって、ローマ都市貴族の長となったのはクレスケンティウス家であった。そのきっかけは、九六五年にヨハネス・クレスケンティウスが教皇ヨハネス一三世となった事であった。彼の教皇座への登位は、オットー大帝の同意を得たもので、皇帝とローマ都市貴族の妥協の産物と言えたが、クレスケンティウス家はオットー大帝の支持を足掛かりとしてローマ都市貴族の長へと躍り出る結果となった[29]。しかしオットー朝とクレスケンティウス家の蜜月関係は長くは続かなかった。

契機となったのは、七九二年のクレスケンティウス家による教皇ボニファティウス七世の選出であった。これに対して反クレスケンティウス派は、同年秋に別にベネディクトゥス六世を教皇に据えた。オットー大帝は、この度は反クレスケンティウス派に与したのである[30]。しかし事態は、オットー大帝の薨去で一変する。九七四年にクレスケンティウス家はベネディクトゥス六世を捕らえ廃位し、サンタンジェロ城に幽閉し、ボニファティウス七世が教皇座に復帰した[31]。この事態に対して、オットー二世はスポレート伯シッコを派遣してベネディクトゥス六世を救出しようとしたが、ボニファティウス七世は獄中のベネディクトゥス六世を絞殺させた。この暗殺に激怒したローマ市民はシッコ率いる皇帝軍に加勢し、今度はボニファティウス七世が廃位されサンタンジェロ城に監禁されたが、ボニファティウス七世は教会財産の一部を横領して逃亡した。その逃亡先がビザンツ領南イタリアであったことが[32]、クレスケンティウス家が既にビザンツ皇帝の総主権下に入っていた事の証左である。

オットー二世はシッコを通じて教皇選挙に介入し、次の教皇に選ばれたのは、嘗てのローマの権門テオフュラクトゥス家出身のベネディクトゥス七世であったが、ビザンツに匿われていたボニファティウス七世がクーデターを起こし、ベネディクトゥス七世をローマから追放し、短期間ではあったが教皇座への二度目の復位を果たした。ベネディクトゥス七世に援助を求められたオットー二世は九八〇年にアルプスを越え、ベネディクトゥス七世を伴ってローマ入城を果たすと、ボニファティウス七世は再度逃亡し、今回はビザンツ帝国の首都コンスタンティノープルに亡命したのである[33]。ベネディクトゥス七世が没するとオットー二世の指名によってヨハネス一四世が教皇座に就いた。しかし、オットー二世が南イタリア遠征でシチリアのイスラム新王朝カルブ朝との戦いに敗れた後に二十八歳の若さで九八三年の七月に病死すると[34]、翌九八四年四月にビザンツ軍に伴われたボニファティウス七世がローマに入城すると、クレスケンティウス一世はヨハネス一四世を廃位しカステル・サンタンジェロに幽閉し、同年八月にヨハネス一四世は獄中で失意の内に没した。かくして三度目の教皇復位を果たしたボニファティウス七世は、約一年間教皇座にあった後に、その波乱の人生を全うしたのである[35]。オットー二世没後、ビザンツ皇女出身の皇后テオファノは幼い我が子オットー三世の摂政として、オットー三世のドイツ王の地位確保に専念したため、オットー朝とクレスケンティウス家との間には利害対立が不在であったので、クレスケンティウス家はテオファノとビザンツ領南イタリアとを繋ぐパイプ役を果たした[36]。また同時期には九世紀以来のフィリオクエ論争を背景に、ローマ教会とコンスタンティノープル教会との間に「シスマ」が生じていたが[37]、この教会対立は、ビザンツ帝国とテオフュラクトゥス家それに続くクレスケンティウス家との関係には全く影響がみられず、教会政治と世俗政治とは別途考察すべき性格のものであること証明する格好の事例である。

クレスケンティウス家とオットー朝との友好関係を破ったのは、テオファノ没後のオットー三世の親政開始であった。オットー三世がイタリア政策に身を投じる契機となったのは、ローマ教皇ヨハネス一五世の援助依頼であった。当時ヨハネス一五世は、クレスケンティウス二世によってローマから追放されていたのである。要請に応えてオットー三世は九九六年にローマに入城を果たしたが、直前の同年四月初旬にヨハネス一五世は熱病で死去していた。オットー三世は後継教皇にオットー大帝の曾孫のブルーノを指名し、ここに史上初のドイツ人教皇グレゴリウス五世が誕生した。その後オットー三世は一旦ラヴェンナに退いて宮廷を同地に置いた。そして同年五月二〇日に再度ローマ入城を果たして、翌日グレゴリウス五世によって皇帝戴冠された[38)]。その後オットー三世はドイツへ帰還したが、直後にビザンツ皇帝バシレイオス二世の援助を受けてクレスケンティウス二世が反乱を起こし、九九六年九月にグレゴリウス五世をローマから追放した。後継教皇としてクレスケンティウス二世は、ビザンツ側の助言もあって、九九七

年五月に南イタリアのギリシア系修道士ヨハネス＝フィラガトゥスをヨハネス一六世として教皇座に就けたのである。これは、ビザンツ帝国が教皇位の人事に介入した最後の事例である。ヨハネス＝フィラガトゥスは、摂政テオファノの側近であっただけでなく、オットー三世の名付け親兼養育係であり、九九五年末から「緋の産室生まれの皇女」をオットー三世の妃として得るべく交渉係としてコンスタンティノープルに派遣されており、イタリアへの帰還直後に教皇座に据えられたのである。おそらくビザンツ側としては、オットー三世とヨハネス一六世との懇意な関係から、オットー三世がこの教皇座簒奪に対して渋々事後承諾すると計算していたのだろう。しかしビザンツ側の思惑は外れ、オットー三世はグレゴリウス五世の復権のためにイタリアに遠征し、九九八年二月にローマに入城して反乱を鎮圧した。退位させられたヨハネス一六世は処刑こそ免れたものの、耳と鼻を削がれ舌を抜かれ眼を潰された上でローマ市内の修道院に幽閉された。クレスケンティウス二世は、サンタンジェロ城に籠城したが、九九八年の復活祭にサンタンジェロ城は陥落し、四月二九日に斬首された上遺体は城壁に吊るされた[39]。

他方ビザンツとの関係はというとバシレイオス二世に対し、オットー三世は「緋の産室生まれの皇女」の降嫁の交渉を続け、首尾良く降嫁が了承された。これはクレスケンティウス家の目からすれば、裏切り行為ともいえる二股外交であった。しかし、オットー三世の運も程無く尽きることになる。一〇〇一年ローマ近郊のティヴォリで反乱が起きたが、オットー三世は短期間で鎮圧に成功した。当時ティヴォリと敵対関係にあったローマ市民はティヴォリの破壊を要求したが、オットー三世はこれを拒否した上に反乱の首謀者たちの処罰も寛大なものであったため、ローマ市民の不満が爆発し、トゥスクルム伯グレゴリウス一世に率いられた市民が反乱を起こした。宮殿を包囲されたオットー三世は一旦降伏してラヴェンナに退いたが、軍備を整えローマへの進軍を計画中に一〇〇二年一月にマラリアで没した享年二一歳、折しも婚約中の「緋の産室生まれの皇女」がプッリャに上陸した所だった[40]。このオットー三世追放後のローマの実権は、再びクレスケンティウス家の掌に戻ったが、党首となったクレスケンティウス三世は対ビザンツ関係には着手しなかった。やはりバシレイオス二世の親オットー政策の不実さへの憤りの故であろう。彼はヨハネス一七世・ヨハネス一八世・セルギウス四世と、三代の教皇を傀儡化したとされるが、ヨハネス一八世の時にサラセン人がティレニア海沿岸を略奪するという事件があったが、クレスケンティウス三世は単独で制圧に成功した[41]。ここから、最早ビザンツ艦隊の助力は不必要という自信を得たのも、ビザンツ総主権化への復帰の必要性をクレスケンティウス三世が感じなかったとしても不思議ではない。ともかく、ビザンツ帝国とクレスケンティウス家との友好関係は、クレスケンティウス三世の代で終焉を迎えたのである。

第四章　ビザンツ帝国とトゥスクルム家

クレスケンティウス家に取って代わるローマ都市貴族の権門はトゥスクルム家である。支配者交代の契機となったのは、ローマからオットー三世を追放した反乱の指導者トゥスクルム伯グレゴリウス一世の息子テオフュラクトゥスが一〇一二年に教皇ベネディクトゥス八世となったことである。同年クレスケンティウス家は対立教皇グレゴリウス六世を擁立し、ベネディクトゥス八世はローマから逃亡した。グレゴリウス六世はオットー大帝の曾孫でザクセン朝最後の皇帝となるハインリッヒ二世に接近を試みたが、実際に皇帝の支持を得たのは追放されたベネディクトゥス八世であり、ハインリヒ二世の援助でローマに帰還を果たすと、一〇一四年にベネディクトゥス八世は、ハインリヒ二世に対して西方皇帝の戴冠式を行った[42]。また死去するまで教皇と皇帝は良好な関係を保ったという点で、ベネディクトゥス八世の時点で教皇は、ビザンツ皇帝の総主権下からの離脱と、西方皇帝（神聖ローマ皇帝）の総主権下に鞍替えした事を明確化したと言える。

ベネディクトゥス八世の対ビザンツ政策はというと、クレスケンティウス三世の脱ビザンツ政策から、反ビザンツ政策への転換を図ったと言える。一〇二〇年にベネディクトゥス八世は、ドイツへと旅立ちハインリヒ二世と会見し、ビザンツ領南イタリアに対する遠征を促し、一〇二二年に実現に漕ぎ着けたからである[43]。ヨハネス八世以来のローマ教皇及びローマ都市貴族で、西方皇帝に対してビザンツ領南イタリアへの軍事遠征を要請したものは皆無であっただけに、ベネディクトゥス八世の行動は際立って見える。従来の研究では、ベネディクトゥス八世の意図として、コンスタンティノープル総大主教の管轄下にあるアプリア・カラブリアへの教皇権の伸長という教会史的視点で見られてきた[44]。しかし、ハインリヒ二世の遠征は占領を伴わない短期的なものであり、教皇権を南イタリアで伸長させるには不十分なものでしかなかった点について、既存研究は説得力のある説明をできないできた。本論考では、ベネディクトゥス八世の意図は、ビザンツ帝国に対する絶縁宣言という点にあったと考えたい。それによって、上記のビザンツ皇帝から西方皇帝（神聖ローマ皇帝）へと、総主を鞍替えした事を満天下に示さんと欲したのだと評価したい。同時期には、シチリアのカルプ朝の略奪も横行していたが、ベネディクトゥス八世はこの頃から南イタリアに定住し始めたノルマン人を使ってイスラム勢力と対峙させるという戦略を取っており[45]、その点でもビザンツの援軍を必要とはしない状況となっていたのである。

一〇二四年にベネディクトゥス八世が薨去すると、後を

継いだのは実弟のヨハネス一九世であった点[46]も注目に値する。第二章で触れたように、テオフュラクトゥス家党首アルベリクス二世は未だ少年であり俗人であった息子オクタヴィアヌスを教皇ヨハネス十二世として教皇座に据えることで権力の世襲を謀ったが失敗した。ヨハネス一九世の場合も俗人であり、教皇就任に当たり司教に任命されるという体たらくであったが、トゥスクルム家の場合は権力継承に成功したからである。繰り返すがヨハネス八世暗殺後は、世俗権力者が歴代教皇を傀儡化した「教皇の銅の時代」であり、ヨハネス・クレスケンティウスの教皇ヨハネス一三世への登位によってローマ都市貴族の頂点に立ったクレスケンティウス家の場合も、その後は傀儡教皇を立てる事で権力を振るった。それは教皇座のあからさまな世襲は、総主たるビザンツ皇帝の機嫌を損ねる可能性が危惧されたからだと評価できる。逆に言うと、既にビザンツ皇帝の総主権から脱して西方皇帝の総主権下に入り、さらには反ビザンツ姿勢を鮮明化させたベネディクトゥス八世以降のローマ都市貴族にとっては、ビザンツ皇帝の機嫌を気にすることなく、教皇世襲化による権力継承できる余裕が生まれたものと評価する。　一〇二四年は、ベネディクトゥス八世が薨去してヨハネス一九世が登位した年というだけでなく、ハインリヒ二世の没年でもあった。世継ぎのいなかったハインリヒ二世の死に際して、ヨハネス一九世はコンラート二世の即位を支持し、一〇二七年の復活祭にサン・ピエトロ大聖堂にて皇帝戴冠式を挙行した[47]。

トゥスクルム家支配は、同家三代目の教皇ベネディクトゥス九世の放蕩三昧の末に破綻した。ヨハネス一九世の甥であるベネディクトゥス九世は、父トゥスクルム伯アルベリクス三世の支援で一〇三二年に最初の教皇座に登ったのはベネディクトゥス九世が一八～二〇歳の若さであった。一〇三六年にローマを追放されたが皇帝コンラート二世の援助で復帰したが、一〇四四年九月に再びローマを追放され、シルヴェステル三世が教皇となるが、一〇四五年四月にローマに復帰し復位したベネディクトゥス九世によって、シルヴェステル三世は廃位・破門・追放の憂き目に会う。しかしベネディクトゥス九世は結婚目的で還俗し、教皇座を代父に当たる司教ヨヘネス・グラティアヌスに売却し、新教皇グレゴリウス六世が誕生した。しかしベネディクトゥス九世は直ぐに心変わりし、グレゴリウス六世を退位させようとしたが、この機に乗じてシルヴェステル三世も教皇としての正当性を主張し、教皇鼎立という異常事態が勃発した。この混乱の朝廷に乗り出したのが皇帝ハインリヒ三世で、一〇四六年一二月ストリの教会会議を主催したハインリヒ三世は結局三人とも退位させた上で、司教スイドガーをクレメンス二世としてドイツ人として二人目の教皇を誕生させた。他の二人の元教皇とは異なり、ベネディクトゥス九世は会議決定を真っ向から拒否し、翌一〇四七年一〇月にクレメンス二世が死去すると、一一月にベネディクトゥス九世はラテラノ宮殿を占領して自身の教皇復位を宣言したが、翌一〇四八年七月にハインリヒ三世によって廃位され、三度目にして最後の教皇位から降ろされた[48]。

その後の教皇ダマスス二世・レオ九世・ウィクトル二世は、三人とも皇帝ハインリヒ三世指名によるドイツ人教皇で、ここにローマ都市貴族による教皇傀儡化の時代は終わったと見ることができる。ローマ都市貴族の最後の抵抗は、一〇五八年トゥスクルム家に率いられたローマ都市貴族による対立教皇ベネディクトゥス一〇世の擁立であった。ハインリヒ三世は一〇五六年に薨去しており、幼帝ハインリヒ四世は未だ八歳で、神聖ローマ皇帝の教皇選挙への介入が絶えた時期を狙っての行動であった。しかし、反ベネディクトゥス派の枢機卿に擁立されたニコラウス二世は南イタリアのノルマン人勢力の援助を受けてベネディクトゥス一〇世派を武力で制圧し、ベネディクトゥス一〇世は降伏し退位した[49]。ノルマン人が将来の教皇のパトロンとなる先ぶれとなったのである。

結びにかえて

本論考は、ローマ都市貴族とビザンツ帝国との関係について考察してきた。

ヨハネス八世以来、ローマ都市貴族もオットー大帝らローマ外勢力も、対イスラム戦でビザンツ艦隊の援助を当てにしていた。ビザンツ側も可能な限り西方の有力者たちの要請に応えてきた。その結果、ガリリアーノ要塞陥落によってローマと南イタリア間の、海賊拠点フラクシネトゥム陥落でローマとアルプス以北間の交通上の危険が払拭された。つまりイタリア半島からイスラムの脅威が去った陰には、ビザンツ艦隊の存在が不可欠であったのである。

もう一つイタリア半島が直面していた海上の脅威は北アフリカのファーティマ朝であった。しかしファーティマ朝は東へ進軍してエジプト・シリアを征服すると、首都を現チュニジアのカイラワーンからエジプトのフスタート・ミスル（現カイロ旧市街）に遷都した。エジプトに拠点を移したファーティマ朝はインド洋貿易に着手し、海軍を紅海の海上治安に専念させた。結果、ガラ空きとなった地中海側の海上保全のために、ファーティマ朝は長年の宿敵ビザンツ帝国に接近し、両国は平和条約を締結し、ビザンツ海軍はエジプト・シリアの地中海沿岸部の海上治安を担当することになった。この条約で結果的にビザンツ帝国は東地中海の制海権を獲得することになり、ビザンツの総主権下にあったアマルフィはコンスタンティノープルだけでなく、エジプト・シリアの沿岸部に多くの商館を築くことができた。他方、遷都で取り残された北アフリカでは、新たにズィール朝が成立し、ファーティマ朝からの分離・独立を果たしたが、遊牧民が建てた王朝であったため海軍創設には消極的

であったため、北アフリカからの海軍遠征や海賊行為の心配はなくなったのである。

北アフリカに代わって、イタリア半島の脅威となったのはシチリアであった。シチリアは、九世紀前半には北アフリカのアグラブ朝の支配下で政治的安定を享受していた。しかし、サラセン帝国瓦解によりファーティマ朝が北アフリカを奪うと、アグラブ朝はシチリアに渡って最後の抵抗を試みた末に滅亡した。ファーティマ朝が奉じていたのがシーア派であったのに対して、アグラブ朝とシチリアはスンナ派を奉じていたため、アグラブ朝滅亡後もシチリアでは民衆蜂起が収まらず、結局ファーティマ朝がシチリア支配を放棄すると、群雄割拠状態から強力なカルプ朝が成立した。カルプ朝と西地中海の制海権を争うことになったイベリア半島の後ウマイヤ朝はビザンツ帝国に接近し、計三回ビザンツ＝後ウマイヤ朝連合艦隊はシチリア艦隊を敗走させる事に成功したのである。エジプトに遷都後のファーティマ朝の事例や後ウマイヤ朝の事例から、ビザンツ帝国の海軍力は西方だけでなくイスラム教勢力からも高く評価されていたかが分かる。九～十一世紀の地中海の制海権争いにあって、最も重要な役割を果たしたのがビザンツ帝国であったことは、イスラムとの関係からも明白なのである。

そして「教皇の銅の時代」を俯瞰した場合、ローマ都市貴族のローマ支配はビザンツの総主権下において花開き、満開を謳歌できたと言える。後に神聖ローマ帝国と呼ばれるアルプス以北のイタリア半島と地続きの帝国は、アドリア海とエーゲ海とに隔てられたコンスタンティノープルを首都とするビザンツ帝国よりもローマ支配に干渉するのに地理的に近かった。その干渉を困難としていたのは皮肉な事にフラクシネトゥムなどのイスラム海賊と山賊であったが、それらの大多数はビザンツ艦隊の援護射撃によって、除去されるに至った。そしてイスラムの脅威の減少は、唯一の頼みの綱としてのビザンツ艦隊の有難みを低下させた。その事が、クレスケンティウス三世の脱ビザンツ路線や、教皇を傀儡化した最後のローマ権門のトゥスクルム家の反ビザンツ政策を促すことになったのだが、それは結局ローマにおけるビザンツとローマ都市貴族の共倒れという結果を招いたのである。

（2019.11.1- 投稿、2019.11.1- 受理）

註

１）*Le Liber Pontificalis*, texte, introduction, ed. L. Duchesne, 3 vols., (Paris, 1886-1957), Tome Ⅱ, Paris (1981), p. 91. (以下 *LP* と略記)

２）Haldon, J., Byzantium in the Seventh Century: The Transfomation of a Culture, Cambridge University Press, (1990), p.89.

３） *LP,* Tome Ⅱ, Paris (1981), p. 91.

４）Agnellus, *Liber Pontificalis Ecclesiae Ravennatis*, ed. O. Holder-Egger, *Monumenta Germaniae Historica Scriptores Rerum Langobardicarum et Italicarium Saec. VI – IX.*（以下 *MGHSRL* と略記）(Hannober, 1878)

５）Thietmari, *Chronicon,, MGH SGUS* LIB. Ⅸ 2ed.(Berlin 1955) *Monumenta Germaniae Historica rerum Germanicarum in usum sholarum*, (以下 *MGH SGUS* と略記), 167-168.

６）Johnnis Ⅷ、*epistolae* , no. *Monumenta Germaniae Historica Epestolae* (以下 *MGH Epp* と略記) Ⅶ, ed. E.Casper, (Hannober 1878), no.207, 169-170.

７）Chronicon Salernitanum, ed. G.Pert, ch.60. *Monumenta Germaniae Historica Scriptores* (以下 *MGH SS* と略記) Ⅲ, (Hannober 1839), 498.

８） *Chronicon di Benedetto Monaco di S.Andrea del Sorratte* , ed. G.Zucchetti, Rom, 1920, *Fonti per la Storia d'Italia* (以下 *FISI* と略記) 55,(Instiuto Storico Italiano) p.157.

９）*LP* , Tome Ⅱ, p. 99-100.

10) Ludvici Ⅱ, imperatoris epistola, ed. .W.Henze *MGH Epp,* Ⅶ, 393.

11）Johnnis Ⅷ、*epistolae* , nos. 230,245,279, *MGH Epp,* Ⅶ, 204-205, 214-215,246-2407.

12）*Ibid.* no.207, 169-170.

13）*Codex Diplomatico Cavensis*, (以下 *CDC* と略記), Ⅰ, (Neapies-Milan, 1873), no. 103, p.131f.

14）Johnnis Ⅷ、*epistolae* , no.,245, *MGH Epp,* Ⅶ, 214.

15）*Annales Fuldanes*, ed. F.Kurze, *Monumenta Germaniae Historica rerum Germanicarum in usum sholarum*, (以下 *MGH SGUS* と略記) Ⅶ, (Hnnober 1891), 109-110.

16）*Ibid.* 99.

17）Flodoardos, *Historia Remensis eccleciae libri quattuor*, *MGH SS,* ⅩⅢ,(Hannober, 1878), Ⅳ2, S.560.

18）*Ibid.* Ⅳ5,S.565.

19）*LP* , Tome Ⅱ, p. 240-241.

20) Leo Marsicanusu, *Chronica Monasterri Casinensis* I, ch.43,ed. H.Hoffmann,, ch. 52, *MGH SS,* ⅩⅩⅩⅣ、134.

21）Ohnsorge,W., Abendland und Byzanz,(Darmstadt, 1979), S.35.

22）*LP* , Tome Ⅱ, p. 247.

23）*Ibid.* p. 249.

24）Annles Fuldenses ed. F.Kurz, *MGH SGUS* Ⅶ, (Hannover 1892), 122-125.

25）*Antapodosis* ed. J.Becker, Liudprandi episcopi Cremonensis, *Opera*, *MGH SGUS* Ⅶ, (Hnnover 1915), LIB. Ⅴ 9. 10, S. 135.

26）Antapodosis, *MGH SGUS* LIB. Ⅱ、S. 5.

27) Liudprandi, *Relatio de Legatione Constantinopolitana, Opera, MGH SGUS* , Ⅶ, 4, S.179-212.

28）Thietmari Merseburgentis , *Chronicon,* ed. Holzmann, *MGH SGUS* LIB. Ⅱ, S97.

29）*LP*、Tome Ⅱ，Paris（1981），

30） *Ibid*.， p. 255.

31) *Ibid.,* p. 254.

32）*Ibid*.， p. 254.

33）*Ibid*.， p. 257.

34) *Regesta Imperii* Ⅱ, 2, *Die regesten des Kaiserreiches unter Otto Ⅱ ,955(973)-983*, ed. By Bohmer,J.F., und Mikoletzky,H.L., (Graz 1950), no. 874b.

35）*LP*、Tome Ⅱ，Paris（1981），p. 259.

36）拙稿、「摂政テオファノ再考」、『文化史学』第六十二号、（二〇〇六年）84-85 頁。

37）東方教会が「聖霊は父より出でて子に向かう」とするのに対して、西方では「聖霊は父と子の双方から出でて」とする教義対立。現在教会統合の最大のネックとされている論争でもある。森安達也著、『世界宗教史叢書３キリスト教史Ⅲ』、山川出版社（一九七八）一七二頁。

38） Thietmari, *Chronicon,, MGH SGUS* LIB. Ⅸ 2ed.(Berlin 1955)， 30.

39）*Ibid.,* 167-168.

40）Boehmer and Uhlirz， *Regesta Imperii* , Ⅱ, 3: Die regesten des Kaiserreiches Unter Otto Ⅲ，no. 1450/ivg，S. 829.

41）*LP* , Tome Ⅱ, p. 269.

42）*Ibid.*, p. 268.

43) Leo Marsicanusu, *ob.cit.* 653.

44）Herrmann K.J.， *Das Tuskulaner Papsttum (1012-1046)*、（Stuttgarrt、1973）, S.55.

45）*Ibid.* S.72-73. Leo Marsicanusu, *ob.cit.* 652

46）*LP* , Tome Ⅱ, p. 269.

47）*Ibid.* p. 270.

48）*Ibid.* pp. 271-273.

49）Beno cardinalis presbyter: Gesta Romanae ecclesiae contra Hildebrandum, *MGH SS, Libelli de lite,* Ⅱ, (Hannover 1892)， 379.